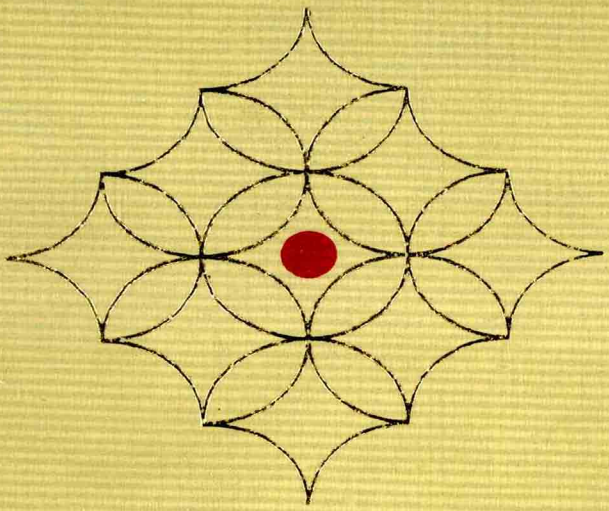

現代日本文學大系

50

尾崎士郎
石坂洋次郎 集
芹澤光治良

●

筑摩書房

現代日本文學大系　50

昭和四十六年五月十五日　初版第一刷発行

尾崎士郎・石坂洋次郎・芹澤光治良集

著者　崎士郎
　　洋次郎
　　光治良

発行者　内静雄

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号一〇一―九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷　株式会社　精興社　製本　株式会社　鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0393 (製品) 10050 (出版社) 4604

尾崎士郎集　目次

巻頭写真
筆蹟
空想部落　三
鶺鴒の巣　六
河鹿　七
蜜柑の皮　三
篝火　八

石坂洋次郎集　目次

巻頭写真
筆蹟
麦死なず　二五
海を見に行く　二七
草を刈る娘　二六

芹澤光治良集　目次

巻頭写真
筆蹟

巴里に死す　二六三
ブルジョア　三五一
死者との対話　三七六

〔付録〕
尾崎士郎　高橋義孝　三八七
人間尾崎士郎　坪田譲治　三九一
石坂洋次郎論　丸岡明　三九六
石坂洋次郎―昭和十年代の一側面―　磯田光一　四〇二
芹沢光治良論　寺岡峰夫　四〇六
芹沢氏と「巴里に死す」　遠藤周作　四一〇

年譜　四一三
著作目録　四二四

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

尾崎士郎集

禁心佛性

十二月

空想部落

序章

丘から丘につづく椎の並木。深い竹藪の中を折りかさなっている落葉の道。それから夕靄である。秋の終りから冬のはじめにかけて靄の深い日がつづく。月あかりにぼうっと照らしだされた牛追村の全景が立ち迷う靄の中からうかんでくるときの、あのひとときの田園のやすらかさをどうして忘れることが出来よう。誇張して言えば彼等の生活は月光の中に描きだされた一枚の影絵であった。その頃この村に住んでいた詩人の浦野空白が、「住めばうれしや牛追村、たがいに見交す顔と顔」とうたったのも当時の彼等の生活を諷し得て妙なりと言うべしである。

まったく妙なことが次々と起った。だれも彼も不遇で生活は呼吸がつまるほどに苦しかったが、しかし不遇であるということが彼等の幻想を湧き立たせ、それが逆に英雄的な昂奮を強いるのであった。目標のないインテリゲンチュアの悩みが彼等の詩であり、生活である。どのような生活の落武者も足ひとたびこの村に入ったが最後没落する感情の中でたちまち息を吹きかえした。それほど時代に対して敏感になりきった神経があり得べからざる感情の上に彼等の生活を築きあげていたとも言えるのである。例えば誰かが村はずれにある風呂屋へ出かけて「笠ノ原獅子五郎」という標札を見つけて帰ってくるとする。丈の低い脳天の禿げあがった風呂屋の主人はその奇妙な名前のためにたちまち有名になり、彼の一挙一動は若い小説志願者の注視の的になった。こういう名前がザラにあるものではない。ところで、その風呂屋があたらしく出来た風呂屋に圧倒されて、没落に瀕してくるとみるみるうちに彼等の正義感は湧きかえった。

「獅子五郎を救え、われ等の獅子五郎を――」

こんな後援者が彼の背後にあることを風呂屋の親爺が知る筈はなかった。彼は一見栄養不良の青年たちが秋の陽ざしの沁みるようながらんとした流し場をわが物顔にほそい毛脛をのばしてごろりと横になった儘、トルストイとストリンドベルヒの比較論をやって長い時間をつぶしているのを見ると忌まいましそうに舌を鳴らした。ある夜、獅子五郎は到頭家財道具をまとめてこっそりどこかへ逃亡してしまったのである。すると、秋晴れの空にそびえている煙の出ていない煙突が、やがて彼等の悲壮なる輿論を喚びおこしたのである。さア、諸君、今夜は燈火をかかげて孤城を死守した英雄の最期を弔うために一杯やろうではないか！

月光は九十九丘を隈なく照らしている。同勢は村長、柿村保吉の邸宅にあつまった。ああ柿村保吉、――彼は面積千五百坪の屋敷に住んでいる。この尊敬すべき好紳士が村長という異名をもって呼ばれるためには彼が十七年間文学に志して、しかもなお且つ今日においてさえ一枚何十銭のしがない飜訳稼ぎをしたり、塙団右衛門の伝記を書いて糊口の資としなければならないほど不遇であるという事実にもとづくものであるが、然し彼は長い間化物屋敷と呼ばれて空家同然になっていたこの大邸宅を向う何年間無家賃の契約で借りうけた事によって愈愈村長たるの面目を全うしたのである。誰だって心持右肩を張った彼が古色蒼然たるラッコの皮のついた外套を着て天の一方を望むという身構えをしながら口をへの字なりに結んでゆっくりと坂を下りてくる姿を見たら彼のほかの村長がどこにいるかと思うにちがいない。今や作者の不幸は彼の偉容を眼のあたり描きだすに足るだけの筆力を持ち合せていないということだけである。それにしても一体、この村に住む誰が彼の世話をうけないで一日一日をすごすことができたであろう

か？

その頃、村長は四十少し前であったであろう。それがときによると五十歳ぐらいに見えたのはラッコの皮の襟のついた外套のせいかも知れぬ。その外套が彼のへの字なりに結んだ唇と実によき調和を示していたのである。しかし、そうは言っても彼自身村長と呼ばれることに多少の侮蔑をかんじないわけではなかったが、彼はそれ等の侮蔑さえも考え方一つで彼に対する親愛に一変するものであることを知っていた。その証拠には、ある夜、若い評論家の平飛高次郎が主唱者となって村民（文学青年）をあつめ村長に先ずラッコの皮の外套を脱がせようではないかということを提議したことがある。場所は街道のはずれにある酒場「カスミ軒」の二階であったが、そのとき平飛のいきり立った意見を聴くとへの字形に結んだ村長の唇がわなわなと顫えだした。

「何をいうか、君たちは、――おれだってこんなものは君たちの眼の前で今にもひき裂いてしまいたいくらいだ、それが出来ないでいる人間の心事がわからんのか！」

村長の顔が曇ってくるとみんな首をうなだれてしまった。

「ああ君」

と、先ず悲痛な叫び声をあげたのは主唱者の平飛だった。

「わかるよ！」

あとは眼顔で物を言うよりほかに仕方がなかった。「わかる」「わかる」とみんなが顔を見合せたのである。それはへの字なりに結んだ彼の唇を開けというにひとしいことではないか。その唇が一種の威厳をもって結んでいればこそ平飛高次郎は十カ月の家賃が滞納して立退命令を喰ったときにさえ村長に嘆願して頑固な家主の老人を説き伏せてもらったではないか。ああ、誰が村長の世話に、否々、ラッコの皮の外套の世話に、そして、への字なりに結んだ彼の唇の世話にならなかったであろうか。それだけではない。彼の家へゆけば袴もあるし紋附の羽織もあるしモーニングもあるし、長靴でも傘でも無いというものはない。そして誰が葬式の日に彼の袴を借りなかったであろうか。誰が彼のモーニングを借りて結婚式に参列しなかったであろうか。われわれはあの古色蒼然たる外套の下に機会だにあらば、はじき出ようとしている村長の青春が淀んでいることを理解しなければなるまい。彼がN県の女学校の教職をすてて上京して来てからやがて五年になるであろうか。あるとき、親しく彼の教えをうけたことがあるという一人の女が彼をたずねてやってきたことがある。彼女はそのときまだ上京したばかりで、あるデパートの売子をしていたが、だしぬけに――まったくだしぬけに一面識しかない大学生から求愛の手紙をうけとったのである。手紙は毎日のように届いた。日に日に高まってくる男の情熱に対して彼女はどう身を躱してよいかわからなくなり、最後に往年の旧師柿村先生に相談する気もちになったのであろう。それは静かな秋の午後であったが、村長夫人はそのとき五人の子供をつれて外へ出ていたのである。時機がよかったのだ。否々、わるかったのだ。それで、向いあって彼女の話をきいているうちに彼の胸の底から何ものとも知れず一つの感情がゴム管のようにむくむくともりあがってきた。おさえきれぬというほどのものではなかったとしても、しかしそれがために村長の心は前よりも一層厳粛になっていたといえるであろう。

「ねえ、君」

といったと思うと村長の右手はもう顫えている女の肩を軽くおさえているのであった。「警戒しなくっちゃいけないよ、男というものがどんなにおそろしいかということを君は知らないんだからね、例えば――」

村長は右手でぐっと女の肩をひき寄せ、左手で膝に置いた女の手をにぎりしめた。「女の感情というものは脆いものだよ――いいかね、例えばこんな風にだしぬけに手を握られたらどうする？」

彼女は身を躱す余裕もなく石のように硬くなったまま身動き一つしなかった。

「このくらいならまだいいんだが、――例えばだね」

彼の表情はますます厳粛になるばかりだ。ああ、例えばである。それから自然の体勢にまかせて女の身体をずるずると彼の方へひきよせた。女は明かに心の平定を失ってしまったというよりも、こういう場合にどういう風に自分を処置していいのか見当さえもつかぬ気もちだった。そのとき、うっとりと眼を瞑じた彼女の顔はへの字なりに結んだ村長の唇のすぐ下までひきよせられていたのである。それはほんの一瞬間だったが村長は彼の唇が女の頬とすれずれになると慌ててぐっと身を反らした。

彼ははじめて大声を立てて笑いだしたのである。「――ねえ、しっかりしなくちゃいけないよ、手紙のやりとりがすぐ一生の運命を決するようなことになってしまうからね、僕はそんな手紙には絶対に返事を出すべきものじゃないと思うな、――とにかく君たちの将来は長いんだからね、男の誘惑には全力をつくして警戒しなくっちゃあ」

村長はもう一度ほがらかな声でからからと笑ったのである。それはそれとしてわれ等の村長柿村保吉が原稿用紙を睨みつけているときの姿ほど神々しいものがあろうか。垣根越しに、ペンを動かしている彼の横顔があけ放した書斎の破れ障子にうつる電燈の灯かげの中に見えることがある。それがわびしく見ゆれば見ゆるほど村長の人気が沸き立つのはまことに自然の道理であった。

村長の家へあつまるとみんな気をぬかれたように押しだまって坐っている。それは彼等がこの部屋の空気の中に心を落ちつかせようとするがためではない。彼等は村長をそとへ誘いだす機会をねらっているのである。村長もまた貞淑な妻をゴマ化すのではなく自然に家をぬけだす環境をつくるためにどんなに肝胆を砕かねばならなかったであろうか。ところで若い小説家志願者たちは、この緊密な人情の機微をとらえることの巧妙さにおいて異常な才能を発揮したと言わねばならぬ。村の乾物屋の二階にくらしている黒住長彦は先ず村長に将棋を挑み、そんなときには際どいところまで彼を追いつめて、それから十分相手に考える隙をあたえてから、こんどは途方もない失敗の一手を案じてひとたまりもなくずるずると追いつめられてゆく戦法を体得していた。この戦法によって彼は必ず敗けることに成功したのである。時には村長も黒住の駒の動かし方が変だなと思うこともあったが、しかし結局そんなことはどうでもよかった。彼が勝ち誇る気勢に乗じてくるのを見計って佐瀬鯛三（彼はまだ叔父の家の食客をしている身の上であった）があらゆる言葉で村長をけしかけ、柿村保吉が十数年前学生時代の同人雑誌に発表した小説を朗読させるのであった。いうまでもなく柿村保吉といえども、これ等の青二才の言説に耳をかたむけていたわけではない。それは彼にとっては「サア出かけよう！」というための気合いのようなものにちがいなかった。この感情の駈けひきを知らないと途方もないまちがいが起る。洋画家の坂貫源平がある夜、一杯機嫌でふらふらと村長をたずね、低い声でその頃坊間に流行した卑猥な唄をうたいだしたことがある。すると、村長の眉が最初は悲しげに顫えていたがやがて彼の全身が波をうつような激しさをもって前にゆらいだと見る間に、

「君！」

と、彼はするどい声でさけんだ。

「家庭ですぞ、君――さア、帰ってくれたまえ！」

「何でえ、――？」

坂貫源平はおどおどしながら立ちあがったのである。

「家庭だよ、君、酒場とはちがうぞ」

「そんなことはわかっているが」

「じゃあ、帰りたまえ」

村長は坂貫を押し出すようにして玄関口に立つとすぐ下駄をはいて格子戸のそとへ出たが、しかし、門の潜り戸をぬけると急に昂然と胸を張り、それから先に立ってあるき出したのである。呑気坊主の坂貫源平にこのような微妙な感情の動きが理解される筈はあるまい。村長はまるで人が変ったように上機嫌であった。それから二人は街道のはずれまであるいて酒場「カスミ軒」の二階に落ちつくのであった。村

長はこの村の理髪店の娘である肥った女給おしげを贔屓にしている。そこで彼女の膝にもたれかかり、朗々と唄いだすのであったが、彼の唄は実にうまい。酒場のそとはいい月夜だし、彼の唄に聴きほれているのは「カスミ軒」のピカ一、おしげだけではない。こんな晩にはどこからともなく仲間が一人二人とあつまってくるものである。それにつけてもこのガタガタ建築の酒場「カスミ軒」の二階ほどこれ等の不遇な青年たちのうら枯れたる生活にふさわしいものはなかった。夜が更けると酔っぱらった連中はうねりつづく丘の中腹の道に長い影をからませてよろよろと行進するのである。月光に照らし出された白い道は彼等の幻想をつらぬいて無際限にひろがっている。近くの森かげに詩壇の大家浦野空白や、一流作家斯垣柴夫の家の灯かげが点々とうかんでいるのを見ると先頭に立った村長は「彼等何するものぞ」という風に肩をそびやかした。そんなときに窪地のへりの竹藪のかげに今にも消えそうに瞬いている横川大助の家の窓ほど侘しいものはなかった。

「おい、大公のところへ行こう！」

村長が号令をかけると一隊はよろよろと行進する。腹一ぱいに唄う村長の声は天までひびくのである。そのとき横川大助は丘を越えてながれてくる村長の唄に耳を澄まし、蒲団の中からむくむくと首をもたげる。退屈しきっている人間の神経ほど敏感なものがあろうか。彼は火鉢のそばで針仕事をしている女房の横顔をおそるおそる覗きこみ、「来たな、畜生！」と舌うちをしながら、しかし、どっとこみあげてくるうれしさを下唇でぐっとおさえ、それからおそろしく深刻な表情をして立ちあがるのであった。

丘の上に長い影を曳いて立っている横川大助の姿が見えるとみんながどっと歓声をあげる。彼の足元ではすすきの穂が月光の中にざわざわとゆれている。これはまことに配所の英雄にふさわしき風景であった。横川大助は落魄する姿にさえ夢を描いている男である。彼は二年前までアンナン独立運動の指導者であったという。しかし、今は翼をもぎとられた鳥にもひとしい身の上なのである。二年前の彼にはまだ運命をきりひらくための第二段第三段の計画があった筈である。それが、此処でひと休みしているうちに彼の心の中には徐々に、そして次第に急激に一つの変化が起りつつあった。あたらしい計画のことごとくがあてがはずれて身動きがとれなくなるにつれて、実際にはまるで役に立たない神経だけが彼の頭の中で跳梁しはじめたのである。何時の間にか彼の生活はこの村の空気にぴったり調子を合わすようになってきた。ありていに言えば彼が文学のために一生を葬ろうという世にも悲壮な決心をしたのは、没落の惨苦の中でぬきさしのならぬところまで追いつめられてきてからであった。

横川大助はこの村の文学青年たちに伍して文壇に乗り出そうなぞと考えていたわけではない。彼こそは書かざる作家である。つまり彼にとっては今や文学だけが現在の窮境から辛うじて自分を救いあげるたった一つの光明であった。もう一歩進んで言えば、彼の中にある実際的能力はこの数年間ことごとくゼンマイの断たれた時計のように動かなくなってしまっていたのである。哀れな横川大助よ、しかし憂うるなかれである。彼はまだどうにかなりそうであった。現実の世界ではあたらしいきずなはどこにもなかったが、しかし空想の計画は彼の胸一ぱいにふくれあがっていた。自然からも人間からも彼はおよそ眼にふれる些末な現象の中に英雄的な誇張と昂奮とをさがし求めないではいられなかった。それほど志をうしなった風雲児は自分自身をもてあましていたということにもなるのである。

横川大助は、この村はずれにある看屋の店先で小僧が飯を喰べているのを長いあいだ見ていたことがある。すると一種の感動が湧きあがってきた。

「ねえ、君」

と、彼はそのときひょっこり会った村長にはなしかけたのである。

「人間というものがあんなに真剣になって飯を喰べる動物だということを僕ははじめて発見したよ、おれたちは飢死するときがきてもあん

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

な風に一生懸命に飯を喰べることはあるまい、僕はあのひた向きな真剣さを見ただけでもう無条件に頭が下るよ」

これ等の日常茶飯事に対する感情の誇張がそのまま牛追村における彼の生活の一切であったと言えないこともあるまい。しかし、ある夜、もう一歩彼を窮地へ追いつめねばならぬような一つの事件が起った。

一人の女が横川大助をたずねてやってきたのである。その女、香島満子はある代議士の愛妾だったが、麻雀クラブに出入しているあいだに彼との関係を生じたのであった。その女が到頭彼をさぐりあてたのだ。もう四十を越して皮膚のたるんだ、どこかとげとげしいかんじのする女の顔は烈しい疲れと昂奮のためにやつれきっていた。

横川大助にしてみれば逃げるつもりではなかったのだが、然し、逃げるよりほかに仕方のない境遇だったのだ。だが彼との恋愛に殉じようと決心して老代議士との関係を断ち切った香島満子が女の真実を裏切って姿を晦ましてしまった不実な男をゆるす筈はあるまい。もし彼女が生活に困っていなかったらそれほどでもなかったであろうが、彼女の窮迫はそのとき絶頂に達していた。もう十二月だというのに、彼女は裾の切れた銘仙の袷を着て、うす化粧をしているのが一層みすぼらしさを唆るのであった。その夜、横川大助の女房は長いあいだ夫の部屋から漏れてくる女の啜り泣く声にじっと耳を澄ましていたのである。

それが甲高い夫の声に変ったと思うとこんどは前よりも一層強い女のわめき声が聞え、それがしいんとなると、まもなく平常にかえった女のあかるい笑い声が聞えていたのである。

泣き声やわめき声のときにはまだしも我慢ができたが、笑い声が聞えると頭が一ぺんに逆上するような昂奮をおぼえた。

そとは風の強い夜で、往来には吹きちらされた砂礫が夜目にも白く舞いあがって見えた。その中へ横川大助の女房はねんねこ半纏で子供をおぶってこっそり家をぬけだしたのである。どこをどう歩いたかわからなかった。気がついたときには窪地を一つ越えた丘の上にある不遇なる作家、浮谷善兵衛の家の戸口にもたれてしくしくと泣いていたのである。

浮谷善兵衛の女房である女流歌人の草上滋子がおそるおそる扉をあけると大助の妻は倒れるように家の中へ入ってきた。

「どうなすったの？」

「あたし――」

大助の妻は彼女の背中で眠っている三つになったばかりの大吉をゆすぶりながら滋子の顔を見あげた。「あたし、もうとてもがまん出来ないんですの、あのひとは、――あのひとは」

声に涙に涸れきっていたが、彼女の説明するところによると横川大助はその夜、女にさんざん毒づかれながら一言のかえす言葉もなく平あやまりにあやまった末、彼の方から進んで二カ年の期限を切って一万円の手切金を渡すという証文まで書いてしまったというのである。

「とても不愉快なやつよ、それに二人のはなしをきいていると、並大抵の関係じゃなさそうなの、――ねえ今のあたしたちに十円のお金だってつくるあてなんかないのに、一万円なんて、そんなお金がどうして出来ると思うの、あの証文のためにあたしたちは一生涯苦しまなけりゃならないことになるんだと思うと」

長いあいだ泣いたり、しゃべったりしたあとで、やっと彼女が平静の状態に復して家へ帰ったのはもう夜あけがたであったが、しかし、わが横川大助はこの悲劇的な苦難を受けることによって悲壮な昂奮をさえも覚えていたのである。その情報が伝わると村長は村の枢要人物をあつめて緊急会議をひらいた。あつまるものは、平飛高次郎、浮谷善兵衛、黒住長彦、坂貫源平の四人にすぎなかったが、そのはなしがはじまると村長は露骨に不興気な顔をしてみせた。「あいつ何故おれに言わないんだ、おれに、――おれにひとこと言ってくれたら」

村長はきっかりと口を結び、それからうしろの柱にかかっているラッコの皮のついた外套をうらめしそうに見あげたのである。だが今となるともう彼の出る幕ではなかった。香島満子はそのときすでに牛追村から十町ほどはなれている大森駅の下のアパートの一室に陣どって

横川大助を彼女の愛情の中へよび戻す準備をしていたのである。

「とにかくどうにかしなくっちゃあ？」

と、村長が口をとがらせた。そのとき黒住長彦が途方もない名案を提出したのである。それによると彼等のうちの誰かが香島満子にちかづいて巧みに恋愛関係をとり結んでしまったらどうだというのである。すると坂貫源平が口をもぐつかせた。「なるほど、そいつはいい——」

彼はそんな芝居なら一役買ってもいいという気がしたのであろう。一座が急に色めき立ってきた。

「ところで、そんな芸当の出来そうな男がいるかね？」

平飛高次郎が眼を白黒させてから、

「どうだい？」

と、黒住の肩を小突いてみせた。「君に自信があるかね？」

「あるとも」

幾分酒の廻っていたせいでもあるが、黒住長彦は貧乏ゆすりをしながら左の痩せ腕をたくしあげた。そう正面から切り出されてみるとみんなうまうまと彼にしてやられたような気もちになったが、しかし、その勇敢なる志願兵が単身敵地に乗り込もうとしているときに横川大助の没落は早くも目睫のあいだに迫ってきていたのである。

香島満子は毎日のように横川大助をたずねてやってきた。彼女の求めているものが一万円の手切金であるよりも以上に彼の痩せ腕と平っぺたい胸であるとすればもはや逃れる術はあるまい。落葉を踏む彼女のあし音が聞えると彼は身も世もない気もちで書斎の窓をひらきひと息に下へとびおりた。これからすぐ裏へ廻って女房の草履をつっかけ竹藪の裏をひと廻りして浮谷善兵衛の家へとびこむのである。そんなことが四五回はあったであろうか。

ある雨のひどい夜だったが、この落ちぶれた英雄がびしょ濡れになって浮谷善兵衛の家を敲きおこしたことがある。彼の顔は蒼ざめ、頬の肉はげっそりとこけて見るも痛ましい姿であった。

「どうしたのかい？」

「ああどうしたもこうしたも」

彼は濡れた着物をぬぎ浮谷の外套を羽織るとやっとわれにかえったというように長い溜息を吐いた。「女がやってきたんだよ、逃げ出そうとするところを到頭見つかってしまったわけさ、それからさんざん泣きつかれて——僕もこんなに困ったことはないぜ、あいつは自殺する用意に何時でもモルヒネを持ってあるいているんだからね、ところ嫌わず泣きわめくやつをやっとのことでなだめつけて今、僕の家へつれていって寝かしつけてきたばかりのところだ、女房は女房でいきり立っているし、どうしたらいいのか、いよいよ夜逃げでもするよりほかに仕方があるまいな」

横川大助の生活はいよいよこの女の執念によって止めを刺されたかたちになった。それから二日目の夜である。牛追村の道という道は深い霧につつまれていた。いよいよ横川大助の逃亡である。村中総動員だ。香島満子の下宿にはラッコの皮の外套を着た村長が乗り込んでもったいぶった調子で女をなだめたりすかしたりしていた。村の要所要所には歩哨が立って女がちかづいて来たらすぐ知らせるという段取りになった。引っ越しには一時間とはかからなかったであろう。やがて一台の馬力が目黒街道の霜柱に轍の音を高く残して消えていったのはいかにも英雄の末路を弔うにふさわしき光景であった。ほっと一息ついた一同が村長の邸宅にあつまったのはやっと九時をすぎたばかりの頃だったが、その夜、酒場の「カスミ軒」の二階では落人の別れにふさわしい最後の宴がひらかれたのである。

「あとは引受けたぞ、——大公、しっかりしろよ」

酔って赤鬼のようになった村長がさめざめと泣きだした。窓をあけると次第にうすれてゆく夜霧のあいだから住みなれた九十九丘が夢のようにうかんでいる。その席上でぐでんぐでんに酔っぱらった横川大助が、ねじ鉢巻をして尻をからげ悲痛な声をふりしぼって、蒙古来るわれおそれず、われはおそるヒステリーの女暴風のごときを——と、

肩を怒らして踊り狂った姿を今日おぼえている人があるであろうか。

横川大助の没落をもっとも身ぢかにかんじたものは何といっても彼の家を眼下に見おろす丘の上に住んでいる若い小説家の浮谷善兵衛だった。

昨日までは夜中に起きあがって窓をひらくと丘の一つの傾斜面を越えて雑木林のかげから小さい灯がたよりなくかすかな微笑をうかべて瞬いているのであったが（その灯かげの中からうかんでくるものはすでに中年を越してなお且青春の夢に憧がれている横川大助の希望にみちた姿であった）――しかし今は彼の視野をさえぎるものは空間を埋める深い闇だけである。

冬の夜の味気なさが窓をうつ落葉の音の中にひとしお深く沁みついてくる。そんなときほど浮谷善兵衛は横川大助の落魄を彼自身の心に近々とかんずることはなかった。いよいよどうにかしなければならぬという気持がどっと彼の胸にあふれてくるのである。しかしどうにかしなければならぬのは彼だけではない。「カスミ軒」にあつまる牛追村住人の誰も彼もが身に迫る変化に対して構えを立てなおさずにはいられないほど烈しい焦躁に襲われるのであった。

丘をめぐる雑木林は片っぱしから伐り倒された。なだらかな傾斜面はまっ二つにきりひらかれて赭土の肌のなまなましい道路が一日ごとに前へ前へとのびてゆく。竹藪のかげに点在していた農家の藁屋根は一つ一つとり壊されてそのあとにはあたらしい文化住宅があとからあとからと軒をならべる。品川湾の海風を正面からうけるこの高台は何時の間にか郊外第一等の住宅地とされて地代はおそろしい速さで騰りはじめたのである。酒場「カスミ軒」の二階には土地会社の出張員やインチキ建築業者があつまってメチルのにおいのぷうんとくる「狸正宗」を呷りながらひそひそと彼等独特の商談をはじめたかと思うと、こんどは途方もない銅鑼声を張りあげてその頃ようやく流行しはじめたばかりのストトン節をうたいだす。

変化は次々にあらわれてきたのである。牛追村にはあたらしい移住者の顔が殖えて静かな田園の風趣は東京の市街地から「ところてん」のように押しだされてきた巷の雑音によってかきみだされようとしている。浮谷善兵衛の家は丘の上にあって教会の屋根のようなかたちをしているので「放送局」と呼ばれていたが、村の出来事が残るところなく彼の書斎に伝達されるとこんどはそれが嘘と誇張にこねかえされてみるみるうちに村中にひろがってゆく。浮谷善兵衛の家は今や名実共に村の噂を報道する放送局に変っていた。そして変化は先ず彼等の先輩である詩人浦野空白の身辺から起った。浦野空白をとりかこむ若い新移住者たちは彼の主唱によってこの村にはじめてダンス・パアティをひらいたのである。浦野空白の意見によるとダンスは家庭生活の倦怠を脱れる唯一の方法である。それは自分の女房がよその男と身体を擦りあわしているのを見ているうちに軽い嫉妬が起り、それが夫婦関係に多少の刺戟をあたえるからだという。

その頃東京市内にもまだダンス・ホールと言わるべきものはなかった。静かな田園の空気は蓄音機のメロディに合せて畳の上にステップを踏む若い男女のむれさわぐ声によってかきみだされた。村長、柿村保吉はダンスの会場にあてられている浦野空白の二階の窓を見あげて長いあいだ立っていたことがある。彼は露骨に顔をしかめ、悲憤やる方なしというかたちで肩をそびやかした。放送局はあたらしい噂でごったかえしている。黒住長彦はある夜、椎の並木の下の道を浦野空白の女房がまるで見ちがえるような断髪洋装のすがたで今まで見たことのない若い男としっかり腕を組んであるいているのを見たという。すると、そのあとから別の報道が入ってきた。

息を切らして放送局へとびこんできたのは坂貫源平である。

「おい、おい――大へんなものを見たぞ」

「何だい、一体？」

そこに居合せた村長がびくっと眉をうごかした。

「ああ、胸がどきどきする」

坂貫源平は大仰な恰好をして首を振ってみせた。彼の見たのはしっかり抱きあった一対の男女であった。その日の夕方であったが彼は通称牛追アルプスと呼ばれてこのあたりの丘の最高峰をきわめている松林にかこまれた丘の上で、そのとき村の全景を一眸のうちにおさめるために断崖のふちにはみだした松の老木によじのぼっていたのである。

坂貫源平は横に伸びた枝に片足をかけ、それから暮れかかる丘の眺望を前にして得意の「浪花節」を唸り出そうとするときであった。松の根方にかさかさと熊笹を分けるような音がしたと思うと異様な叫び声が聞えたのである。坂貫源平は咽喉元までこみあげてきた声を慌ててぐっとおさえつけ、おそるおそる下を覗いてみると、彼の靴の尖が空中に浮游しているそのすぐ真下にしっかりと寄り添っている二人の男女の姿が見えたのである。折柄あたりは夕闇にとざされてはいたがうっとりと眼を俯せた女の顔が彼の視野の中にぼうっとうかびあがった。

「そいつが君――」

と、彼は咽喉をごくりと鳴らした。「あの女だよ」

「あの女って、――誰だい？」

村長が膝を乗りだした。

「香島満子だよ――僕はたしかにこの眼でしっかりと見届けたんだ」

坂貫源平の声はまだかすかな顫えを残していた。

「それで、男は？」

村長の唇がひきしまった。

「そいつが君、佐瀬じゃないか――びっくりしたぞ僕は」

彼は咳き入るような声で、

「あきれはてたよ、いいかね、こういう風にあいつが女の肩を抱きすくめて」

彼はだしぬけにきょとんとして坐っている黒住長彦の首筋に手をかけた。

「おい、しっかりしろよ」

急いで払い退けようとする黒住の肩を彼はもう一度力強く締めつけながら、

「まるでおれは呼吸がつまりそうだった、おそろしくって今にも転げ落ちそうな気がしたよ」

一瞬間の情景がなまなましい色彩を点じて、彼の心をおびやかすのであった。「こうして」「こうして」と、長い接吻の仕草をこまごまとしゃべりつづけているうちに彼は何時の間にか小さい黒住の身体を膝の上に抱きあげていたのである。

村長は口をへの字なりに結んだまま頬をぷうっとふくらませた。

「おどろいたな、そいつは――あの女は君、今朝おれのところへ大助の居どころをたずねてきたばかりなんだぜ、まるで見ちがえるようにいきいきしていると思ったらやっぱりそんなことになっているんだな、畜生」

薄化粧をした香島満子の若々しい横顔が彼の脳底にひらめくと町長は胸一ぱいに沁みひろがってくる遣瀬なさをかんじた。彼は横川大助がようやく半生の難を遁れたことを喜ぶ前にどっと押し寄せてくる時代をかんじたのである。彼の眼の前ではあらゆるものが動きだした。もう誰が誰だかわかるものではない。間もなく変化の火の手は浮谷善兵衛の放送局に燃え移った。彼の妻である草上滋子は丈なす黒髪を断ち切ってモダンな洋装に一変した。それと前後して「××雑誌」の懸賞小説に応募して金一千円を手にした浮谷善兵衛はおのずからにしてあつまって来た彼の一党を引具して家を外に銀座のカフェーに出没しているという噂がつたわった。あらゆるものが一つの方向に向ってながれだしたのである。詩人浦野空白が、何を感じてか妻を捨て家を捨てて「港は更けるルムペンの、思いあがったたくらみは、藁に束ねた乾し鰈、犬に食わせて酒を飲む」――と、世にも悲痛なる哀章を残してこの村を去ったのはそれから二三ケ月後のことである。さて、時は昭和初年、以上は牛追村の全景であるが、この物語はそれからおおよそ五年の後、牛追村に町制が布かれ、大東京に編入された頃からはじ

まる。

牛追ホテル

牛追村が一名九十九谷という異名で呼ばれていることを知っているものはほとんどあるまい。伝説によれば数百年の昔、太田道灌が江戸城を築こうとしたとき最初の候補地に挙げられたのは谷と丘にとりかこまれたこの牛追村であったという。作者は往年このあたりを逍遙して鍬を肩にした一人の老農夫が鹿爪らしい口調で得々とはなすのを聴いたことがある。彼の意見によると、土地の調査にやってきた道灌が大小の谷を数えてみると、そのときちょうど九十九あったそうである。九十九では困る、もう一つないか、――と道灌がいったかどうかは知らぬが、しかし、今一つの谷が見つからないばっかりに牛追村はついに日本帝国の首都の枢要地たるべき機会を逸し去った。その九十九谷の最高峰を極める牛追アルプスの松林のかげに村の風景を一眸の下におさめる「牛追ホテル」が兎も角も巍然として聳えるようになってからようやく一年近くになる。兎も角もというのは、一見堂々たる構えではあるが、内容はどこかのボロ建築を二束三文で買いとってきた古材木で建てたものらしく、あたらしい壁の色がなまなましく残っているかと思うと虫の喰いちらしたあとで埋まっている柱には古いにおいがしみついているし、安手の洋室があるかと思うとその横の便所は木理のぬけた古い板戸のすき間から夜風が忍びこんでくるといった風の不得要領の建物であるが、しかし、そのようなチグハグな感じがひとしおさびれた印象をふかめるのもほとんど客のいないせいであろう。眺望絶佳の地にこのホテルを建てたことは経営者の覘いどころであったにしても、自動車も俥もやっと丘の下へ辿りつくだけでそこから三町あまりの小径を熊笹を分けてのぼるという趣向は思案に過ぎたりというべく、どうせ客筋といえば一夜の感興に乗じてやってくる女づれの泊り客にきまっているのだから途中までのぼってくるまでには、蕭条たるうらさびしさに襲われて一応考えなおす気もちになってしまうであろう。この半歳あまりの間に牛追ホテルが早くも没落に瀕しているのも故あるかなである。

さて、早春三月初旬のある夜、――このホテルの二階の一室にめずらしくも電燈の光が窓に輝いている。断崖に臨む老松（その松の枝は数年前、洋画家の坂貫源平がよじのぼったときのままの美しい枝ぶりを示している）の姿が夜空にくっきりとうかび出しているのであった。大きなトランクが次々と運びこまれた。客は「貿易商、横川大助」である。肩書は変れども名は変らず、一風呂浴びて安手の安楽椅子にどっしりと腰を据えた中年の紳士はもはや牛追村でかすかな空想をたよりに生きていた文学青年ではない。変り果てたる今日の姿に何人が数年前、霧の夜にまぎれて鼠のごとく逃亡した横川大助を想い浮べるであろうか。彼はボーイの運んできた正体の知れぬウィスキーをぐっと呷り、それから立ち上って正面の窓をひらいた。九十九丘は夜目にも白々とかすんで見える。

森かげに点在する燈火を追いながら、うす闇の中にうねうねとつづく道を彼の心は行きつ戻りつするのであった。すぐ前の窪地を越えた丘の上に村長、柿村保吉の邸宅がある。横川大助はあたらしい葉巻に火をつけてから女中を呼んで俥を命じた。

「どちらへいらっしゃるんで？」

顔中吹出ものだらけの青くむくれた女中がエプロンのはしで手を拭きながら水洟をすすりあげた。

「昔の友人を訪問するんだ、急いで呼んでくれよ」

ああ村長の驚く顔が眼に見えるようではないか。つい眼と鼻の距離であるが歩いていったのでは恰好がつくまい。早春の夜風を浴びて横川大助は村長の邸宅へ俥を走らせた。

最近の数年間、村長は多少の老衰を彼の肉体の上にハッキリ感ずるようになっていた。ときどき上膊が堅くなり、長く坐っていると全身

に痺れるような疲れをおぼえた。しかしそれがために彼の青春が衰えたのではない。肉体の敗退が逆に観念化された彼の情慾を唆しかけるのである。かつてこの村に住んでいた浦野空白がダンスによって夫婦生活の倦怠を救おうとしたと同じように、彼は独特の方法でこの難関を切り抜けようとしていた。

ところで彼の方法は詩人空白がその浪曼的な性格にもかかわらずおそろしく実際的な方法（――それが彼を失敗に導いた原因であった！）を選んだことによって失敗したのとひきかえ、これは途方もなく浪曼的であるにもかかわらずおそろしく現実的な効果を覘ったものであった。いやにもったいをつけるようであるが話は至極簡単である。「夫婦生活の倦怠だって、――ちゃんちゃらおかしいや、おれのように無数の仮説をもって生きている人間には倦怠なんていうものはないよ」

これが詩人、空白のダンス催情論を罵った彼の言葉であった。そのような仮説が何によって生じたかということはしばらく別問題として、村長柿村保吉は、彼の仮説を生かすために前の晩、「書生」になったかと思うと次の晩は「強盗」に変装するために憂身をやつした。それが度重なるにつれて――というよりも彼の肉体が老衰をふかめるにつれて夢想の中の快楽は何時の間にか現実の不安にかたちを変えているのであった。

その夜――やっと十一時をすぎたばかりのころだったが、村長は月末の窮乏を救うためにふた晩徹夜して、「愛と涙の人生悲劇、猿が人か、人が猿か」という大小説を書きあげたばかりで心魂共に疲れ果てていたのである。そんな晩に彼の神経が異常な敏感さに張りみちていたことはいうまでもあるまい。十時といえば五年前にはまだ宵の口であったが彼はこの一年間、やがて女学校に入ろうとする子供たちのために「九時就寝」という原則をうち立ててきたのである。

ひと眠りしたあとだったが、ひそやかに落葉を踏むあし音に彼はびくっとして眼を醒ました。

たしかに人のあし音である。村長は首筋をぶるぶるっと顫わせた。それから自分を落ちつかせるために片眼をとじ、あけている方の片眼で闇の中を透かすようにしてじっと呼吸をこらした。

（いよいよやってきたな！）

彼がもし仮説論者でなかったらこれほどおどろきはしなかったであろう。村長は歯を喰いしばった。あのへの字なりに結んだ唇が、彼の表情をこれほど深刻にしたことはあるまい。

女房と子供たちの眠っている隣の部屋から洩れてくるあかりが、彼の心に重苦しい幻影をそそぎ入れる。（この世の中で彼のもっともおそれている瞬間が眼の前にちかづいているのだ）

裏の雨戸をこじあけようとするような音がしたと思うと、霜柱の溶けた土を踏むあし音が彼の脳天にしみとおるようにひびいてくる。村長柿村保吉はもう生きた心地もないのである。しかしながら、読者諸君よ、われわれは理解しなければならぬ。彼――村長の生活が常に一つの限界によって保たれているということを。その限界の中において彼ほどに威厳を示して生きている人間はあるまい。別の言葉でいえば彼ほどに自分に伴う名声と人気とを遺憾なく活用している人間はいないのである。

牛追村にはすでに町制が布かれて村の風景は一変していたが、しかし、人気と声望に多少の消長があったとはいえ柿村保吉が昔ながらの村長の権威に任ずることに対して誰ひとり異存を挾むものはなかった。その柿村保吉が限界を破ろうとするものを何故おそれねばならぬかという心理は容易に理解することができるであろう。彼のおそれているのは深夜に他人の寝込をおそって侵入してくる命がけの覆面男ではなくて自分を支えている限界を失うことによって見るかげもなく萎縮してしまう自分の姿に触れることだけである。

面倒な言い廻しになったが、要するに一口に言えば、彼はその晩、昔の恋女房である美穂子夫人を相手に大へんややこしいひと芝居を演

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com